

ニヒリズムと系譜学

竹内 綱史（龍谷大学）

はじめに

「私が物語るのは、次の二世紀の歴史である。私は、やって来るもの、もはや別様にはやって来るできないもの、すなわちニヒリズムの到来を記述する」¹。

この有名な文章は、かつて『権力への意志』という表題で纏められていた「主著」の序文に置かれており、「ニーチェにおけるニヒリズム」を語る際には欠かせないものとなってきた。そしてここから展開される「ニヒリズム論」は、「数千年来のヨーロッパの歴史」を「転覆」するという、(ほとんど滑稽なほどの)「大きな物語」というのが、お決まりのパターンである。だが、ニーチェはどれほど「本気」で、このような「大きな物語」を主張しているのだろうか。これをわれわれはどれほど「真面目」に受け止める必要があるのだろうか。というのも、そのような「本気」さや「真面目」さこそ、ニーチェが忌み嫌っていた当のものだったはずだからである。

ニーチェ研究史的には、1960年代に、所謂「実存主義」の退潮と「ポストモダン」の興隆、そして批判版（グロイター版）全集の刊行開始（それによって『権力への意志』が「偽書」として最終的に葬り去られたわけだ）とが重なって、上のような「大きな物語」を軸にしたニーチェ解釈は、とくに「時代遅れ」となった感がある。エリーザベト・ニーチェの「悪行」を糾弾したり、ハイデガーや西谷啓治といったニヒリズムの「大家」たちがその「偽書」に依拠していたことを言い立てたりするのも、もはや「今さら」感がある。けれども、(これもしばしば指摘されてきたことだが)あの「偽書」に記されている文章自体はニーチェの手になるものであることは確かなのだから、一種の「流行」に便乗して、ニヒリズムという問題を軽視するのもおかしなことではあるだろう。

¹ November 1887-März 1888, 11[411], 2.

ニーチェのテキストは以下のものを使用した。

KSA: *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari. München, Berlin/New York, 1980.

著作略号は以下の通り。

MA: *Menschliches, Allzumenschliches*. Bd.2, S.9-366.

M: *Morgenröthe*. Bd.3, S.9-331.

FW: *Die fröhliche Wissenschaft*. KSA, Bd.3, S.343-651.

JGB: *Jenseits von Gut und Böse*. KSA, Bd.5, S.9-243.

GM: *Zur Genealogie der Moral*. KSA, Bd.5, S.245-412.

上記著作からの引用は、本文中に「略号（+論文番号（ローマ数字））+節番号（アラビア数字）」で示し、遺稿については慣例に従い、書かれた時期・ノート番号・断片番号（+（断片によっては）節番号）で示す。訳文はすべて拙訳。原文の強調は省略し、引用文中の強調はすべて引用者によるものである。[] は引用者による補足、[...] は省略を示す。原語を挿入する際は、現代の綴りに直すこととする。ニーチェ以外の参考文献は巻末の文献表参照。

ニヒリズムとは一般的に、この世界で生きる意味を欲しているにもかかわらず、世界がそれに応えてくれない、という事態を指す。自己の側における意味への欲望と、世界の側における意味の不在という事態が、同時に起っている状況である。それゆえ、所謂「ニヒリズムの超克」とは、自己と世界との「和解」である。そしてこの「和解」には二つの方向性が存在することになる。一方は、自己の側で、意味への欲望を断念すること、無意味な世界へと自己を合わせるように、自己を変容させること。もう一方は、世界の側に、意味を見いだすこと、世界を意味あるものへと解釈し直すこと。自己を世界に合わせるのか、世界を自己に合わせるのか。

かくして、ニーチェ解釈においても、「ニヒリズムの超克」とは、極限的に無意味な世界を受け入れる、すなわち、〈永遠回帰〉を肯定できる自己へと自らが変容を遂げる、という「実存主義的」な方向性がある一方、世界とは〈権力への意志〉が織りなす解釈の無限の戯れであり、将来に向けて過去の解釈を変更することで、私（というある特定の〈権力への意志〉）が生きる意味のある世界を（も）作り出す、という「ポストモダンの」な方向性もある。

だがもちろん、これら二つのニーチェ解釈の方向性は、どちらもそのままでは素朴にすぎる。自己のあり方と世界の現れ方は、別々に考えられるものではない。

問題の所在は、ニヒリズム論が置かれるべきニーチェ哲学内部のコンテクスト、とりわけ「解釈」という論点である。たしかに、どんな「ニーチェのニヒリズム」論であろうと、「権力への意志」説を取り上げないものはないし、「権力への意志」説を取り上げるならば、「解釈」という論点が入ってこざるを得ない。けれども、ここで問題にしたいのは、ニーチェ自身が自らの主張を一つの「解釈」と見なしていた点である。ニーチェは、自らの主張を、「真理」として提出しているのではないのだ。そうでなければ、つじつまが合わないはずである。普遍妥当的な「真理」なるものを誰よりも批判していたのが、他ならぬニーチェだったからだ。

そもそも、「大きな物語」という類のもの、言わば超歴史的な何らかの「原理」の展開として歴史が推移するといった「形而上学」的ないし「預言者」的歴史哲学に、ニーチェがコミットしていると考えるのは、無理がある。ニヒリズム論と同様によく知られている通り、ニーチェ哲学の基本的立場は、この世界の「唯一正しい」記述なるものは存在しない、というものである。それゆえ、ニーチェが物語る「次の二世紀の歴史」なるものも、一つの「解釈」にすぎないし、ニーチェ自身もそんなことは重々承知の上で、上の文章を書いているはずなのだ。ではいったい、ニーチェは何をしようとしているのだろうか。

以下では、まず、冒頭に引用した文章を含む断片を再検討することで、問題の所在をより明確にし（第1節）、遺稿などを中心にニーチェのニヒリズム論を再構成した上で（第2節）、最後に、『道徳の系譜学』（以下、『系譜学』と略）で語られる歴史のロジックを明確にすることで（第3節）、ニーチェのニヒリズム論と系譜学の射程を考え直したい。

1. 「大げさに語る」こと

「私が物語るのは、次の二世紀の歴史である。私は、やって来るもの、もはや別様にはやって来ることができないもの、すなわちニヒリズムの到来を記述する。今やもうこの歴史は物語られ得るのだ。なぜなら、必然性自体がここで働いているからである」²。

ニーチェが語ろうとしているのは、「歴史 (Geschichte)」である。歴史を「記述 (beschreiben)」するのだ、と。けれども、「次の二世紀の歴史」を「記述」するなどということが、なぜできるのか。それをニーチェは「やって来るであろうことを物語る際に後ろを振り返る、予言の鳥の精神として (als ein Wahrsagevogel-Geist, der zurückblickt, wenn er erzählt, was kommen wird)」³行うのだと言う。この、「未来を振り返る」とは、いかなる事態なのか。

それは、他の人々に先駆けてニーチェは未来を既に生きたのであって、他の人々にとっては「二世紀後」にあたる地点から「振り返って」、「歴史」を「記述」するというのである。ニーチェにおいて、歴史の進行には「先」を歩む者と「後」からついて行く者がいることはしばしば強調されており、悪名高い「貴族政礼賛」は、歴史哲学においては前後関係を意味している⁴。ニーチェは歴史の「貴族」として、他の人々に先駆けて生きている、と言うのだ。ほとんど狂人的な大言壮語にしか聞こえないが、それが、「ニヒリズム自体を既に自らにおいて終わりまで生き抜いた、ヨーロッパの最初の完全なニヒリストとして」⁵語ることなのである。

ポイントは、最初の引用にあった「必然性」が、いかなる必然性なのかという点だろう。それは、誰もが否応なく巻き込まれざるを得ないような歴史の必然性、超歴史的な原理の展開であるような必然性ではありえない。そのような究極奥義を極めた地点からニーチェが託宣を下していると考えるから、話がややこしく（あるいは単純に？）なるのである。歴史のそのような「客観的」必然性を、ニーチェが語っているわけではないのだ。語られているのは、言わば、「主観的」な必然性なのである。

ニーチェは、「すでに未来の各迷宮に一度迷い込んだことのある、大胆な、そして——試みる＝誘惑する精神 (ein Wage- und Versucher-Geist) として」⁶語る、と言う。それは、未来に向けて実験的に生きてみて、そこで得られた洞察を実験的に語ってみることである。「私が生きているような実験哲学 (Experimental-Philosophie) は、試みに (versuchsweise)、自ら原理的なニヒリズムの諸可能性を先取りしている」⁷。そしてそのような語りによって、人々を自らの方へと「誘惑 (Versuchung)」すること⁸。

² November1887-März1888, 11[411], 2.

³ November1887-März1888, 11[411], 3.

⁴ E.g. M453, JGB257, etc., cf.竹内 2007, 2010.

⁵ November1887-März1888, 11[411], 3.

⁶ Ibid.

⁷ Frühjahr-Sommer1888, 16[32]. ニーチェの「実験哲学」については、竹内 2010 参照。

⁸ 「試みる＝誘惑する者 (Versucher)」については、以下の有名なアフォリズム参照。「哲学者のある新しい種族が到来する。私は敢えて、彼らに危険でなくもない名前を授けよう。[...] この未来

しばしば見逃されて（無視されて）きたことだが、冒頭の引用は実は、「序文」の「第2節」である⁹。それに先立つ第1節には、次のようなごく短い文章が置かれている。

「偉大なものごと（große Dinge）は、人がそれについて沈黙するか大げさに語る（groß reden）ことを、必要とする（verlangen）。大げさにとは、シニカルに、また、無邪気に（mit Unschuld）、ということである」¹⁰。

この「序文」が語り方についての注釈から始まるのは重要だ。単純に「客観的」な事実の「記述」をするわけではないことを、一番初めで前置きしているのである。「偉大なものごと」が「偉大」であるためには、それに相応しい「語り方」が必要なのだ。

ここで「必要とする」と訳した *verlangen* は、従来「要求する」と訳されてきたが、そう訳すならば、「客観的」に生起している歴史的出来事に、われわれが合わせることを「要求」されているという意味になる。ニーチェはそのような歴史理解をしていない、というのがここでの論点である。そうではなく、通常とは異なる「語り」（「沈黙」もまた「語り」の一種だ）によって初めて、「偉大なものごと」が偉大になるのであるから、そのような「語り」を、「偉大なものごと」は「必要」とするのである。また、「大げさに語る」と訳した *groß reden* も、従来「大いに語る」などと訳されてきたが、これは「大口を叩く」「大言壮語をする」という意味にとるべきというのが本稿の理解である¹¹。「偉大なものごと」の「偉大（groß）」さと、「大げさに語る」際の「大げさ（groß）」さとは、相互依存の関係にある。

それゆえ、この「序文」第1節で語られているのは、こういうことだ。これから私＝ニーチェは、「ニヒリズムの到来」と「あらゆる価値の価値転換の試み（Versuch einer Umwertung aller Werte）」という出来事が「偉大な」出来事であるという印象を読者に与えたいので、大げさに、超然と距離をとり（＝「シニカル」であり）つつも、素朴にそのことを信じ込

の哲学者たちは、試みる＝誘惑する者（Versucher）と呼ばれる権利を、ひょっとしたら不当な権利を、持ちたがるかもしれない。この名前自体が結局は単なる一つの試み（ein Versuch）であり、お望みなら、一つの誘惑（eine Versuchung）なのだ」（JGB42）。Cf. Picht1988.

⁹ これはかつての『権力への意志』の「序文」としてもそうであった。そもそもこの断片にはニーチェの手によって（それゆえ現行のグロイター版全集でも）「序文（Vorrede）」という標題がつけられており、ニーチェが当時構想していた「主著」に付すことを想定した「序文」の下書きである。それゆえ、『権力への意志』の編者たちがこの断片を自分たちの編集した本の「序文」として採用したこと自体は、責められるべきことではないだろう。

¹⁰ November1887-März1888, 11[411], 1. なお、これで第1節の全文である。

¹¹ 例えば、竹山道雄訳（新潮社版全集）と原祐訳（理想社／ちくま学芸文庫版全集）は「大いに語る」となっている。「沈黙」と対比させられているのだから「饒舌」であろうとの理解から「大いに語る」と訳されるのだろうが、それでは後に続く文章（「シニカル」かつ「無邪気」）の意味が取れない。清水本裕／西江秀三訳（白水社版全集）は「堂々と語る」となっており、西谷啓治はわざわざ注釈をつけて「ずばりと語る」と訳しているが（西谷 1947:45）、ニーチェの「語り方」の意味を誤解していることに変わりはない。Kaufmann/Hollingdale の英訳（*The Will to Power*, Random House: New York, 1967）は *speak with greatness* となっており、同様に誤解していると思われる（もっとも、Kaufmann は英語の意味よりもドイツ語からの直訳を好む傾向があるので、*große Dinge* (great things) と *groß reden* (speak with greatness) の繋がりを重視しただけかもしれない）。Ludovici の英訳（*The Will to Power*, Russell & Russell, Inc.: New York, 1964）は *speak loftily* となっており、（確証はできないが）本稿の理解に近いかもしれない。Grimm などの各種辞典類も参照のこと。

んでいる (=「無邪気」である) かのよう¹²に、語るのだ、と。つまり、自らが語っている歴史の必然性が「主観的」なものでしかないことを重々承知しつつ、まるでそれが「客観的」な必然性であるようなフリをして語るのである。

歴史の「主観的」な必然性についての「大げさ」な記述。こうした叙述スタイルを看過すると、ニーチェの立場を誤解することになる。ニーチェが語る「次の二世紀の歴史」の「必然性」は、特定の歴史解釈にすぎない。ある意味当たり前のことだが、そのような歴史の「必然性」は、解釈に「すぎない」というよりも、一つの解釈としてしか、語りようのないことである。そんなことは分かりきった上で、あえてニーチェは、言わば「戦略的大言壮語」というスタイルを採用しているのだ。そして、そのスタイルを方法論的に十分自覚した上で展開されているのが、他ならぬ『系譜学』である。『系譜学』のサブタイトルは、「一論争書 (eine Streitschrift)」であった。これは、「客観的」な歴史記述ではないこと、そもそもそのような歴史記述は存在しないことを、含意しているわけである¹²。

以上、ニーチェの「語り方」を確認したわけだが、『系譜学』の歴史ロジックの議論に入る前に、彼のニヒリズム論の内容を概観しておこう。

2. ニヒリズム

「ニヒリズム。目標が欠けている。「何のために？」への答えが欠けている。ニヒリズムとは何を意味するのか？——至高の諸価値が無価値になること」¹³。

ニーチェにおいて、ニヒリズムとは第一義的に、生きる「意味」ないし「価値」の問題である。「価値」の存在によって、向かうべき方向、つまり「意味 (Sinn)」が生じる。上の有名なニヒリズムの「定義」は、これまでの価値体系を統べていた至高の諸価値が無価値化したことで、あらゆる価値が無価値化し (たと思われ)、生きる意味が見失われてしまったことを言っている。価値や意味の不在は、人間にとって何よりも耐え難いことである。「人間、この極めて勇敢で苦悩に慣れた動物は、苦悩をそれ自体として否定しはしない。苦悩の意味、苦悩の何のために (Dazu) が示されたならば、人間は苦悩を欲し、苦悩を探し求めさえするのだ。苦悩ではなく、苦悩が意味を欠いていることが、これまで人類の頭上に広げられた呪いだったのである」(GM, III, 28)。快苦という原初的 (と見なされることの多い) 局面ではなく、常にその「意味」を問題にする姿勢はニーチェにおいて一貫しているが¹⁴、その「意味」が見失われてしまったこと、それがニヒリズムなのである。

¹² Cf. Stegmaier1994:57.

¹³ Herbst1887, 9[35].

¹⁴ これはショーペンハウアー批判でもあり、ニーチェが同時代の功利主義などを批判する際の主要な論点でもある (Cf. JGB225; August-September1885, 39[15]; Sommer1886-Frühjahr1887, 6[25]; etc.)。また、ニーチェの哲学上の処女作『悲劇の誕生』が、この世界の禍悪 (Übel) をいかに「是認=正当化 (Rechtfertigung)」できるかという問題と取り組んでいたことはよく知られているが (Cf.竹内 2011)、その問題が (苦悩の)「意味」の問題、つまりニヒリズム論に引き継がれているわけである。

しかし、「至高の諸価値の無価値化」というあの有名な「定義」では、ニヒリズムの理解としてはまだ不十分である。というのも、この「定義」は世界の側から「価値」が消えてしまったことを述べているだけなので、それに「合わせる」ように、私たちは意味への欲望を断念することが「要求」されているという話になってしまいかねないからだ¹⁵。ニヒリズムとは、そんな単純な問題ではない。先にも触れたように、自己の側における意味への欲望と世界の側における意味の不在という事態が同時に起っている状況がニヒリズムなわけだが、この二つの事態の関係こそが問題なのである。「レンツァーハイデ草稿」¹⁶には、以下のように書かれている。

「われわれは今や、以下のような諸欲求が自らにあることを突き止めた。それは、長期にわたる道徳という解釈 (Moral-Interpretation) によって植えつけられた欲求であり、今となってはわれわれにとって非真理であるもの (das Unwahre) への欲求として現れているような欲求である。他方でその欲求は、そのおかげでわれわれが生きるのを耐えている当の価値がそこに懸かっているような、欲求なのだ。〔一方で〕われわれが認識しているものを評価せず、〔他方で〕われわれが自分自身を騙しておきたいことをもはや評価することが許されないという、この対立状況 (Antagonismus)、——それが解体過程 (Auflösungsprozess) を生み出すのだ」¹⁷。

この「解体過程」が、ニヒリズムである。その前提として、「対立状況」があると言われている。それは先に述べた意味や価値への欲求とその不在という対立状況であるが、「価値」とはそもそも世界の側に客観的に備わっているのではなく、「評価」の問題であり、評価する主体はわれわれなのである。価値の不在は、われわれが認識している世界には評価し得るもの (= 価値あるもの) がいないということである。われわれは、価値を欲求しつつも、同時に、価値あるもの・評価できるものを、世界の側に「認識」できないのだ。その意味で、価値への欲求は、「非真理であるもの」、つまり対応物が実在しない対象への欲求なのである。それゆえ、価値への欲求を満たすためには、われわれは価値あるものが「真理」であると自分を「騙さ」なければならないわけだが、それは「許されない」。

しかるに、ここで「騙す」ことを「許さない」のは何者なのだろうか。それは実は、われわれ自身なのである。「私は欺きたくない、自分自身も欺きたくない」(FW344) というわれわれの「真理への意志」が、自己欺瞞を禁じているのである。真理への意志は、われわれをして、何をおいても「真理」を追求させ、科学的世界観を生み出させたものである。

¹⁵ これは「はじめに」で触れた「実存主義的」ニーチェ解釈の方向性である。この「定義」が『権力への意志』という「偽書」の冒頭部分に置かれていたことを差し引いても、そのタイプの解釈がニヒリズムのこの「定義」を重要視してきたことは、偶然ではないだろう。

¹⁶ 「レンツァーハイデ草稿」(ないし「レンツァーハイデ断片」)とは、「ヨーロッパのニヒリズム レンツァーハイデ 1887年6月10日」と冒頭に記された草稿のこと(Sommer1886-Herbst1887, 5[71])。ニーチェ自身による手作りの小冊子になっていた。16の断片が順序だてて並べてあり、ニーチェのニヒリズム論に関して、もっとも重要な草稿の一つ。かつての『権力への意志』という「偽書」には、この草稿に掲載されている断片が切り刻まれてバラバラに掲載されており、あの本の編者による「暴力」の最たるものと見なされている。詳しくは、Riedel2000、川原2005、参照。なお、『系譜学』はこの草稿が作られた一ヶ月後に執筆されている(1887年7月執筆、同年11月出版)。

¹⁷ Sommer1886-Herbst1887, 5[71], 2.

科学的世界観は、人間的な「価値」や「意味」を世界から抜き取った。それゆえ、ニーチェによれば、われわれの真理への意志こそ、世界を価値無きものとした当のものであり、その世界に、われわれ自身が耐えられないのである。われわれがニヒリズムで苦しむのは、われわれ自身のせいなのだ。ニヒリズムが到来するのは、「生存の不快感 (Unlust am Dasein) が以前より大きくなったからではなく、禍悪のうちに、いや生存のうちに於ける「意味」に対して、そもそも不信の念が生じたからである」¹⁸。非真理である価値を求めることを「許せない」のは、われわれ自身の真理への意志なのである。

ニーチェは初期以来、科学的世界観と、その世界観からしたら「誤謬」でしかない「価値」をめぐる問題をくり返し論じており¹⁹、ニーチェ哲学の根本問題 (の一つ) と言ってよい。例えば、中期の著作『人間的、あまりに人間的』でもすでに、「生の価値や尊厳に対するどんな信仰も、不純な思考に基づいている」(MA33) と述べ、「真理は生に、もっとよきものに、敵対するのではないか? [...] 人は意識的に非真理の中に留まることができるのだろうか? あるいは、そうせざるを得ないのなら、死んだ方がましではないだろうか?」と問うていた (MA34)。われわれが「生きる」上でどうしても必要な価値への欲求と、あの真理への意志との対立が、ニヒリズムの「対立状況」の基礎にあるのである (Cf. FW110, 346)。

かくして、問題の焦点は、「真理への意志」である。そもそも、なぜわれわれは「非真理」ではなく、「真理」を意志するのだろうか。「われわれの内であって、そもそも「真理へ」と意志しているのは、何であるのか?」(JGB1)。真理への意志とは、われわれが意志したりしなかったりできるものではない。真理とは無条件で目指すべきものなのだ。つまり、真理への意志はわれわれの個々の意欲や行為を規制する「上位」の審級である。つまりそれは、われわれに対して、「良心」²⁰として働きかけているのである。そしてこの「良心」の働きによって、『系譜学』で語られる歴史の一大転換点、「道德の自己超克」が果たされることになる。

「今なおわれわれに対してある「汝なすべし」が語りかけており、今なおわれわれはわれわれを超えた或る厳格な法則に従っていること、それは疑い得ない。[...] 今なおわれわれは良心の人 (Menschen des Gewissens) なのだ」(M, Vorrede, 4)。

3. 真理への意志から権力への意志へ

『系譜学』第三論文の (したがって『系譜学』全体の) 有名なクライマックス部分で、ニーチェは次のように書いている。

¹⁸ Sommer1886-Herbst1887, 5[71], 4.

¹⁹ その一部は、竹内 2009b, 2010、参照。

²⁰ 良心の一般的特徴やニーチェ哲学内部における位置づけについては、竹内 2003、参照。

「教義としてのキリスト教は、自らの道徳によって没落した。かくして今や道徳としてのキリスト教もまた、没落せざるを得ない。——この出来事の敷居に、われわれは立っている。キリスト教的誠実さは、一つ一つ結論を引き出した後に、ついにはもっとも強力な結論を引き出すのだ。おのれ自身に対する結論を。しかるにそれが起こるのは、その誠実さが「あらゆる真理への意志は何を意味するのか？」という問いを立てるときである。[...] 真理への意志が自己を意識するに至ることによって、今後、——疑う余地は無い——道徳は没落する。これこそ、ヨーロッパの次の二世紀にとっておかれている百幕の大演劇、あらゆる演劇の中でももっとも恐るべき、もっともいかがわしく (fragwürdig)、おそらくまた、もっとも希望に満ちた、大演劇なのだ…」(GM, III, 27)。

「次の二世紀」の歴史であるニヒリズムが到来する、その「必然性」のロジックを、ニーチェは次のような諸段階として考えている。①キリスト教道徳が誠実さ (=真理への意志) を育み、②その誠実さが神を殺害し、さらには、③道徳を疑わしいものにし、ついには、④自分自身を否定することで、⑤自らが権力への意志であることを自覚する。①と②は所謂「神の死」という問題であり、すでに起きた出来事である²¹。③と④は「道徳の自己超克」のことであり、ニヒリズムの歴史の内実をなす。ここまではよく知られたストーリーであるが、本稿が注目したいのは、ニーチェ自身は⑤の場所に立って、「後ろを振り返る」形で、このストーリーを語っている、という点だ。そう、あの「序文」で語られていたように、ニーチェは「やって来るであろうことを物語る際に後ろを振り返る、予言の鳥の精神として」²²語っているのである²³。

ではまず、ニーチェのそうした「語り方」を論じる前に、①～④のストーリーを確認しておこう。

「教義としてのキリスト教」が「没落」したこと、つまりキリスト教の神が信じられなくなったのは、意図的にわれわれが神を「殺した」わけでもなく、神が自ら「退去した」わけでもなく、われわれが神信仰を自分に許せなくなったからである。そのようなことは「科学的良心」にもとるのだ。「そのような考えはもはや過ぎ去った。そのような考えを持つならば、良心が反対する」(FW357; GM, III, 27)。神なき世界で生きるよう私に迫るのは、私自身の良心なのである。「二千年にわたる真理への訓練 (Zucht) が、ついには神信仰の虚偽を自らに禁じたのだ」(GM, III, 27; cf. FW357)。

「科学的良心」は「知的良心」とも呼ばれるが、その本質をニーチェはあるところで「確

²¹ もっとも、ニーチェは「神の死」で③④も示唆することが多い。有名な「狂気の人」(FW125) は、「無神論者」に対して「神の死」の(これからやって来るであろう) 恐ろしさを語っており、それは③④のことを指していると考えべきだろう (cf. 竹内 2010)。なお、①②と区別されるとき、③④の出来事が「神の影」と呼ばれることもある (FW108, 109, cf. FW343)。

²² November 1887-März 1888, 11[411], 3.

²³ 『系譜学』には未来の話は出てこないが、それを前提として語られており、続編も予告されている (GM, III, 27)。続編のタイトルは「ヨーロッパのニヒリズムの歴史に寄せて (Zur Geschichte des europäischen Nihilismus)」であり、『系譜学』の原題 (Zur Genealogie der Moral) との並行関係が念頭にあると思われる。内容はレンツァーハイデ草稿のようなものが当然想定されるが、『系譜学』で予告された形での出版は結局なされなかったわけである。

実性の切望」(FW2)と言っていた。キリスト教的に言うなら、救いの確かさを追求すればするほど、敬虔であればあるほど、罪や不確かさの探索が厳しさを増す。自分で自分を監視し、詮索し、純粹さを追い求める。さらには、何らかの「答え」にたどり着いたとしても、「本当にそうなのか？」という問いが、そうした答えを消去して行くだらう。科学的真理探究の原動力にもなった、こうした問いの力によって、「神は死んだ」のである。しかし、それはまだ始まり（①②）でしかない²⁴。

「道徳によって育て上げられた諸力の中には、誠実さがあつた。この誠実さが、最終的に、道徳に向けられ、道徳の目的論を発見する。すなわち、道徳が利害関心を含んだものの方（*interessierte Betrachtung*）であることを発見するのだ」²⁵。

道徳は「無私」ではない。それは何らかの「価値」にコミットしている。注意すべきは、これは個々の道徳的行為が「不純」な動機から行われているというレベルの話ではない、という点だ。現実の人間とは無関係にすべきことはすべきであるという、「純粹」な道徳の命令そのものが持つ党派性が、問題になっているのだ。「いかなる諸条件のもとで人間は自らに善悪というあの価値判断を発明したのか？そして、その価値判断自体はいかなる価値を有しているのか？」(GM, Vorrede, 3)。この問いに対するニーチェの答えはあまりにも有名だ。道徳は弱者の発明品であり、弱者による「奴隷一揆」の産物であり、それがコミットしている価値はいかがわしいものなのだ、と。以上が③である。

さらに④の段階に至るには、「真理への意志が自己を意識する」(GM, III, 27) が必要である。それはつまり、真理への意志の個々人における発現形態である「知的良心」が、自らに「なぜ私はこの知的良心に従うのか」と問うことである。「誠実さ」とは何かということについて、ひょっとしたらまだ誰も十分に誠実であったことはないのかもしれない」(JGB177)。これは良心の本質である自己吟味（自分で自分を監視し責めること）²⁶が必然的にたどり着く地点なのだ。

かくして、真理への意志は、自らが「純粹」ではないことを自覚する。そもそも「純粹さ」や「真理」を追い求めること自体が、特定の価値の追求だったのだ。別の表現を用いるならば、真理への意志とは、一つの権力への意志だったのである。権力の意志説についてここで詳論することはできないが²⁷、本稿の文脈で言うならば、価値への欲求のことである。無数の権力への意志が、価値を評価し合い、せめぎあう中で、生が営まれる。真理への意志は、ある特定の権力への意志の現われでしかなかった。他にも多くの価値評価がありうるのである。「この世界は権力への意志である——そしてそれ以外の何ものでもない！ あなたがた自身もまたその権力への意志である——そしてそれ以外の何ものでもないのだ！」²⁸。

²⁴ Cf. FW108, 125, 343.

²⁵ Sommer1886-Herbst1887, 5[71], 2.

²⁶ Cf.竹内 2003.

²⁷ Cf. Müller-Lauter1974, 1978; 竹内 2009a.

²⁸ Juni-Juli1885, 38[12].

『系譜学』が語る歴史は、真理への意志が自らを権力への意志であると自覚することで大団円を迎える。けれども、ニーチェは初めからその地点に立って、歴史を記述していたはずである。キリスト教道徳や真理への意志という、言わば「勝者」のパースペクティブを初めから相対化し得ていなければ、例えば第一論文の善悪の二重の歴史を語ることはできないからだ。「次の二世紀」の歴史を語るのは、真理への意志を脱した地点から「振り返って」、自らの足跡を語ることで、後から自分について来る者たちの歴史を叙述するというスタイルをとる。しかし当たり前ながら、後からついて来る者がほとんどいないこともあり得るだろう。つまり「予言」は当たるものではないし、そんなことはニーチェも初めから織り込み済みのはずである。むしろ、「予言」というスタイルは、「客観的記述」などではなく、それ自身、歴史に働きかけようとしているものなのだ。

『系譜学』は全体として、人類の歴史がニーチェの権力への意志説へと目的論的に進んできたかのような一本の線を描いているわけだが、これぞまさしく「大きな物語」であり、途方もない大言壮語であろう。ニーチェはそうした「大きな物語」を語ることで、自らの生に再び「意味」を見出そうとしているかのようにも見える。「われわれにおいてあの真理への意志が自分自身を問題として意識に上るということでないとしたら、われわれの全存在はいかなる意味を持つのだろうか？」(GM, III, 27)。ニヒリズムの歴史を語る 것이そのまま、生きる意味のある世界の叙述になっているかのようなのである。

しかし、歴史が単線ではないということは、『系譜学』の中で何度も強調されていることである (E.g. GM, II, 12-13)。歴史は「語り」に依存するのであって、歴史解釈が無数にあり得ることは前提なのだ²⁹。しかしそれでも、ニーチェは自らの歴史を語る。大げさに語る。それは、自らが立っている地点、真理への意志が瓦解し、権力への意志でしかありえないことを自覚した語りなのだ。そしてまたそれは、現在において圧倒的な支配力を持っている特定の権力への意志に対する批判になっている。現在が歴史の転換点・分岐点であることを示すことによる批判である。『系譜学』は全体として、道徳が批判されざるを得ない歴史的地点にわれわれが到達していることを示すことによって、道徳を批判するのだ。

別の箇所でも、ニーチェはこう言っている。「真の哲学者の真理への意志は——権力への意志である」(JGB211)。つまり、ニーチェが——「真の哲学者」として——やっていることは、「権力への意志でしかありえないこと自覚した真理への意志」を自ら演じること、「未来を振り返る」こと、支配的な権力への意志を批判すること、要するに、戦略的大言壮語なのである。

おわりに

「ニヒリズムの到来はしかるになぜ必然的なのか？ それは、ニヒリズムにおいてその最終的な

²⁹ 本稿では論点として採り上げなかったが、ニーチェにおいては、歴史解釈が無数にあり得ても、そのすべての解釈が同等の「正しさ」を有するわけではないことは注意すべきである。この問題については、竹内 2007, 2008b、参照。

帰結を引き出すのが、われわれの従来の諸価値自身だからである。ニヒリズムがわれわれの偉大な諸価値や諸理想の最後まで考え抜かれた論理だからである。——われわれはニヒリズムをまず体験せざるを得ず、その結果、これらの「諸価値」の価値はそもそも何だったのかについて事情を嗅ぎつける (dahinter kommen) ことになるからである。…われわれは、いつの日か、新しい諸価値を必要とするだろう」³⁰。

ニーチェが語るニヒリズムの歴史は、意味への欲望が、意味なき世界を作り上げたという逆説であった。ニヒリズムとは、ある特定の意味への欲望——〈真理への意志〉に偽装した特定の〈権力への意志〉——による自作自演の悲喜劇だったというのである。ニヒリズムに「巻き込まれ」て、意味への渇きに苦しむことは、悲劇であろう。だがニーチェに言わせれば、それは自業自得の喜劇なのだということになる。良心の自己吟味が足りていないのだ。真理への頑なな意志によって、自分で自分を袋小路に追い込んでいるだけなのである。しかし、そうは言うものの、一度墜ち込んだら脱するのは簡単なことではない。「非真理を生る条件として承認すること。このことはもちろん、ある危険な仕方、諸々の習慣的な価値感情 (die gewohnten Wertgefühle) に抵抗することである。そしてそれを敢えてなす哲学は、それだけですでに自らを善悪の彼岸に置くのだ」(JGB4)。それができるのは、自らが権力への意志でしかあり得ないと自覚した真理への意志だけである。その意味で、上の引用にあるように、「われわれはニヒリズムをまず体験せざるを得」ないのである。

ニーチェが自らの語る歴史に対してアイロニカルだったことは、彼の哲学全体を統合的に理解しようとするならば、想定せざるを得ないことである。ニーチェはニヒリズムの語りに関して、百パーセント「本気」だったわけではないのだ。しかし、『系譜学』の序文で語られているような、「認識の根本意志」(GM, Vorrede, 2) に導かれているのだという運命論も含めて、それは単なる「主観的」な歴史の必然性でしかないとするのは、単純化が過ぎるかもしれない。同様に、ニーチェの立場を本稿では「戦略的大言壮語」と呼んだわけだが、どこまで「戦略」なのかも議論の余地がある。というのも、ニーチェはアイロニーをアイロニーとして受け止めることをも求めていると思われるからである。つまりニーチェは、「大げさに」語られた内容についてそのまま信じ込むような読者ではなく、「大げさな語り」であることも了解できるアイロニカルな読者を求めている節があるのだ。そうでなければ、あの「序文」の冒頭で、「今から大げさに語ります」と宣言するはずがないからである³¹。

とはいえ、ニーチェ自身の立場が、権力への意志を体現していることは、間違いないと思われる。『系譜学』の序文には、異論に対して「反論」するのではなく、「真実らしくないものの代わりにより真実らしいものをおき、場合によっては誤謬の代わりに別の誤謬をおく」のだと書かれているが (GM, Vorrede, 4)、そうした「誤謬」同士のせめぎあいこそ、

³⁰ November 1887-März 1888, 11[411], 4.

³¹ しかしもちろん、あの「序文」は結局出版されていないのだから、実際に宣言したわけでもないのだが。

権力への意志が織りなす世界そのものであるはずだからだ。それゆえ、ニーチェは、権力への意志説自身もまた一つの解釈であるという自己言及的な問題提起³²をしつつ、以下のように答えるのである。

「これもまた解釈にすぎないとしたら——これに異議を唱えるために十分あなた方は熱心になるだろうか？——そうならば、ますます結構なことだ（um so besser）」（JGB22）。

文献表

- Foucault, M. (1999b) 「ニーチェ、系譜学、歴史」、伊藤晃訳、『ミシェル・フーコー思考集成IV』、筑摩書房、11-38 頁。
- Heidegger, M. (1943) „Nietzsches Wort ‚Gott ist tot‘“, in: *Holzwege*, Gesamtausgabe, Bd.5, Frankfurt am Main, 1977, S.209-267. (=「ニーチェの言葉「神は死せり」」、茅野良男／ハンス・ブロッカルト訳『杣道』、ハイデッガー全集第5巻、創文社、1988年、235-296頁。)
- (1961) *Nietzsche*, 2Bde, Stuttgart, 1998. (=圓増治之／ホルガー・シュミット訳『ニーチェ』(I、II)、ハイデッガー全集第6-1巻、第6-2巻、創文社、2000年、2004年。)
- 本郷朝香 (2010) 「遅れてきた主体 ——ニーチェ哲学においてボスコヴィッチ学説が開く、新たな主体概念の可能性」、『理想』第684号、理想社、153-165頁。
- Kaulbach, F. (1980) *Nietzsches Idee einer Experimentalphilosophie*, Köln/Wien.
- 川原栄峰 (2005) 「ニーチェの「ヨーロッパのニヒリズムについてのレンツァーハイデ断片」をめぐって」、ペルトナー／渋谷 2005 所収、1-20 頁。
- 氣多雅子 (1999) 『ニヒリズムの思索』、創文社。
- 三島憲一 (2011) 『ニーチェ以後 ——思想史の呪縛を超えて』、岩波書店。
- Müller-Lauter, W. (1974) „Nietzsches Lehre vom Willen zur Macht“, in: ders., *Über Werden und Wille zur Macht*, Nietzsche Interpretationen I, Berlin/New York 1999, S.25-95. (=新田章訳「ニーチェの権力への意志説」『ニーチェ論攷』、理想社、1999年、37-124頁。)
- (1978) „Der Organismus als innerer Kampf: Der Einfluß von Wilhelm Roux auf Friedrich Nietzsche“, in: ders., *Über Werden und Wille zur Macht*, S.97-140 (=新田章訳「内的闘争としての有機体——ヴィルヘルム・ルーのフリードリヒ・ニーチェへの影響」『ニーチェ論攷』、125-173頁)。
- 西谷啓治 (1949) 『ニヒリズム』、『西谷啓治著作集』第8巻、創文社、1986年。
- 新田章 (1998) 『ヨーロッパの仏陀 ——ニーチェの問い』、理想社。
- Nehamas, A. (1985) *Nietzsche: Life as Literature*. Harvard University Press. (=湯浅弘・堀邦維訳『ニーチェ ——文学表象としての生』、理想社、2005年。)
- 岡村俊史 (2005) 「パースペクティヴィズムは自己論駁的か？ ——ニーチェにおける「真理」と「解釈」」、日本ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』別巻第1号、24-42頁。
- (2010) 「パースペクティヴ的批判の可能性 ——「自己超克」の場としてのニーチェ哲学」、『理想』第684号、理想社、130-141頁。
- Owen, D. (1994) *Maturity and Modernity: Nietzsche, Weber, Foucault and the ambivalence of reason*, Routledge. (=『成熟と近代 ——ニーチェ・ヴェーバー・フーコーの系譜学』、宮原浩二郎／名部圭一訳、新曜社、2002年。)
- Picht, G. (1988) *Nietzsche*, Stuttgart. (=青木隆嘉訳『ニーチェ』法政大学出版局、1991年。)
- G・ペルトナー／渋谷治美編 (2005) 『ニヒリズムとの対話 ——東京・ウィーン往復シンポジウム』、晃洋書房。

³² この問題については、岡村 2005、参照。なお、岡村俊史氏の論考や氏との議論から、本稿は多くの示唆を得ている。記して感謝したい。

- Riedel, M. (2000) *Nietzsches Lenzscheide-Fragment über den Europäischen Nihilismus. Entstehungsgeschichte und Wirkung*, Zollikon-Zürich.
- Stegmaier, W. (1994) *Nietzsches ›Genealogie der Moral‹*, Darmstadt.
- 須藤訓任 (1981) 「ニヒリズムの自己超克 ——意味の（無）意味性の顕現として」、『理想』第 583 号、84-100 頁。
- (2011) 『ニーチェの歴史思想 ——物語・発生史・系譜学』、大阪大学出版会。
- 竹内整一／古東哲明編 (2001) 『ニヒリズムからの出発』、ナカニシヤ出版。
- 竹内綱史 (2003) 「ニーチェ哲学における良心という問題」、京都宗教哲学学会編『宗教哲学研究』第 20 号、65-76 頁。
- (2007) 「ニーチェ・アイデンティティ・ミニマリズム ——「対話」のプラクティスに向けて」、片柳栄一編『ディアロゴズ ——手探りの中の対話』、晃洋書房、239-258 頁。
- (2008a) 「自由精神と自由意志 ——『人間的、あまりに人間的』におけるニーチェの自由論」、関西倫理学会編『倫理学研究』第 38 号、100-111 頁。
- (2008b) 「『生に対する歴史の利害』の問題圏 ——理論の批判から批判の理論へ」、実存思想協会編『実存思想論集 XXIII アジアから問う実存』、139-156 頁。
- (2009a) 「ニーチェ ——絶対の喪失という希望」、伊藤直樹・齋藤元紀・増田靖彦編『ヨーロッパ現代哲学への招待』、梓出版社、27-55 頁。
- (2009b) 「アポロンとソクラテス ——『悲劇の誕生』の歴史哲学再考」、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフュシカ』第 40 号、13-26 頁。
- (2010) 「ニーチェの実験哲学」、『理想』第 684 号、理想社、61-74 頁。
- (2011) 『『悲劇の誕生』の形而上学再考』、龍谷哲学会編『龍谷哲学論集』第 25 号、1-32 頁。
- 渡辺二郎 (1975) 『ニヒリズム ——内面性の現象学』、『渡辺二郎著作集』第 6 卷、筑摩書房、2010 年。

Tsunafumi TAKEUCHI

Nihilismus und Genealogie